

令和6年度 京都府立東宇治高等学校学校経営計画（実施段階）
（スクールマネジメントプラン）

学校経営方針(中期経営目標)	昨年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
自主性を基盤に、社会と関わり、課題を解決しようとする人の育成をめざす。 そのような人を「みらいを明るくできる人」と定義し、その育成のために、生徒に次の姿勢を身に付けさせる。 (1) 挑戦する姿勢 (2) 周囲と関わる姿勢 (3) 努力し続ける姿勢	○学校行事及びオーストラリア、アメリカ、タイ、台湾との国際交流事業の実施が普段通りになり、多くの生徒が一定の充実感を感じたことは評価できる。 ○校則については、生徒会及び教職員の意見を踏まえて見直し図り、生徒へ周知することができた。 ○学校評価アンケートでは、9割以上の生徒が充実感を持って学校生活を送っていることが窺えた。次年度以降も本校の教育活動についてさらに見直しを行い、教職員が一丸となって組織的に取り組んでいくことが必要である。 ○生徒募集においては、山城通学圏の中3生が昨年度に比べ減少したが、本校の特色ある取組について中学生、保護者、地域に広く理解を促すことにより、入学者選抜において一定の成果を出すことができた。来年度も引き続き、広報活動等に積極的に取り組み、中学校との連携を密にすることが必要である。	中期経営目標に掲げた本校のスクール・ミッション及び本校の教育目標を踏まえ、本年度は次の目標に重点を置く。 (1) 人権意識と社会性の涵養 日々の教育実践が、人としての基本を身に付け、互いの人格を尊重し、人権意識を備えた人材の育成の場であることを常に意識する。 (2) 規律ある態度の育成及び校則等の見直し確かな学力の育成のため、授業規律及び生活規律を生徒に身に付けさせるよう学校全体で継続的な指導を図る。また、生徒指導提要の趣旨を踏まえ、引き続き校則及び諸規定についての見直しを図る。 (3) 授業改革及び教育のUD化 1人1台タブレット端末等のICT機器の活用を積極的に推進し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」がより良く連携することで、主体的・対話的な深い学びが相乗効果を発揮できるようにするとともに、観点別評価の実施と併せて生徒の学習改善を図る。また、特別支援教育の観点から授業を含めたすべての教育活動においてUD化を推進する。 (4) キャリア教育と進路指導 社会への貢献、社会とのかかわりを意識づけるキャリア教育を進めるとともに、高大接続改革などに対応した丁寧な進路指導を一人一人に行う。 (5) 総合的な探究の時間 「国際教育と地域連携をテーマとした探究学習」の研究をさらに推進し、その探究の成果を生徒の進路実現のために活用する。 (6) 外部機関との連携 大学等の研究機関、地元小中学校、地域の団体または海外の高校などとの連携を深め、グローバル社会・地域社会で活躍するための素養を醸成する。 (7) 働き方改革 ICTを活用した教科・分掌等の業務内容の効率化を推進し、教職員が生徒と向き合う時間を確保しつつ、ライフワークバランスを踏まえた働きがいのある職場環境を整える。 (8) 教育課程の見直し 従来の英語探究コース及び文理コースの教育課程を見直し、本校の特色を最大限に活かすことができる独自の教育課程を編成する。

重点目標

<分掌・領域>

A:十分達成できた B:ほぼ達成できた C:あまり達成できなかった D:ほとんど達成できなかった

領域	重点目標	短期経営目標達成に向けての具体的取組	評価	成果と課題
組織・運営	分掌間及び教科間の連携・協働の推進	本校の教育目標の実現に向け、各分掌部長及び教科主任が主たる調整役となって、関係する分掌及び教科と連携・協働し、効果的・効率的に業務を遂行することによる働き方改革の推進を図る。	B	関係する分掌部長、教科主任で起案文書を回議することを推進し、連携・協働の推進を図る一助とした。今後は、計画的に事前の調整、連携がさらに推進し、業務の見える化を行い働き方改革を行った。
教務部	・授業改善 ・観点別評価についての改善 ・働き方改革に伴う業務の見直しと精選	・効果的に公開授業を行い、授業のUD化やICTの利活用を促進するとともに、授業の改善を図る。教員、生徒がともに「授業を大切に」という意識をもち、授業規律、各種届の提出を徹底させる。 ・全学年に観点別評価が拡大され、観点と評価の関係についても、教科間の交流を図り、改善を行う。 ・あたり前に行っていた内容も、工夫・改善を行うとともに、デジタル採点システムの導入により、業務の軽減を行う。	B	・公開授業週間では昨年度に比べ、教員の参観数が増加した。また、定期考査での全科目UDフォントで統一や授業開始時に目標を明示するなど、UD化の取り組みが進んでいる。一方で、授業のUD化には教員間で温度差があるように感じる。公開授業を通じた研修会を実施することで、必要性を感じてもらい、抵抗感を無くしていきたい。また、生徒の各種届については、昨年度に比べ、多くの生徒が速やかに提出するようになった。 ・観点別評価について教科を越えて交流することができなかった。次年度以降、授業改善、観点と評価について一体となって考えていく必要がある。 ・デジタル採点システムの導入により、考査期間以降の成績処理にかけられる時間は軽減されつつある。2学期以降、過半数の教員がデジタル採点システムを採用している。

領域	重点目標	短期経営目標達成に向けての具体的取組	評価	成果と課題
総務企画部	・魅力的な広報活動の展開 ・地域に開かれた学校づくり	・中学生に本校の魅力を伝えるため、各分掌・教科・生徒会・部活動と連携し、学校説明会や部活動体験等を行うことで、効果的な広報活動を展開する。 ・PTA・教育後援会の運営・活動を役員と協力して円滑に行う。 ・地域の方や保護者、中学生等に学校の様子や生徒の活動が伝わるように、PTA広報誌、Webページ、Instagram等を活用する。	B	・中学校訪問や、学校パンフレット、東宇治通信の充実により、学校説明会、オープンスクールなどのイベントに多くの参加者があった。(昨年比8%増) ・今年度のPTA活動は全て円滑に実施できた。広報を工夫することで社会見学会の参加希望者が増加し、実施することができた。 ・Webページや、Instagramを充実させ、本校の教育活動を知ってもらうことができた。
生徒指導部	・部活動の活性化 ・学校行事(生徒指導部主管)の活性化 ・教職員で連携が取れた中で全校体制での生徒指導の推進	・部活動の活性に向けて、生徒の所属部活動を随時把握し、入退部などの登録管理を徹底する。及び部活動ミーティング、部員清掃など部活動全体での取り組みの再開。 ・文化祭、体育祭における生徒の充実度や満足度をより高いものとなる、取り組みにする。 ・学年との連携や様々な分掌との連携を密にし、全教職員で一致した生徒指導を行う体制をつくる。	AB	・部活動加入率の上昇(A) ・文化祭、体育祭の生徒の満足度5段階の4以上が文:97%、体:93%で満足度の高い行事となった(A) ・生徒指導対応(C) ・トラブル対応などや遅刻指導や身だしなみ指導で、連携を図り進められたところもあったが、まだまだ学校全体で一貫した指導という面では大きな課題があると感じた。
進路指導部	生徒が進路学習を通じて、社会との関わりを意識したキャリア形成を行い、希望進路実現に邁進する姿勢を涵養するために必要な支援を行う。 生徒だけではなく教職員も高い人権意識を持つための啓発活動を行う。	学年や状況に応じた進路学習を企画運営する。また、入試に対応できる学力を育成するために各種学力テストなどを活用できる環境を整え、教科、学年部との連携を図り東宇治高校が抱える課題を共有する。さらに、1・2年については、学習用端末を用いた新たなキャリア教育の方法について、情報収集や検討を進める。 人権啓発活動の一環として人権教育及び研修などの企画運営を行う。特に、学習用端末を持つ学年が1～3年生の全学年となるため、このような状況下で必要となる人権教育及び研修について検討を進める。さらに、昨今、取り上げられている人権を意識した研修について検討を進める。	B	・進路学習は、計画通り滞りなく実施できた。 ・各種学力テスト・模擬試験は計画通り実施できたが、どのように生徒の日常的な学習習慣の定着につなげていくかが課題である。 ・学習用端末を利用したキャリア教育については、より良い活用方法等についてさらなる検討が必要である。 ・人権教育は、計画通り滞りなく実施できた。また、教職員対象の人権研修を実施し、今後の本校の人権教育の在り方についても議論することができた。 ・進路学習や人権学習で高まった生徒の意識が、日々の学習活動や学校生活に持続的に繋がっていくような工夫やしかけが必要である。
保健部	生徒の心身の健康を守り、安心・安全な学校づくりを推進する。	・生徒の抱える心身の健康課題の多様化に対し、他分掌と連携を図りながら学校全体で組織的に対応する。 ・健康上配慮の必要な生徒や不登校傾向など様々な課題を持つ生徒に対する相談活動を充実させるとともに、健康課題の緊急性・必要性を見極め、カウンセリングを有効活用する。	B	○保健室への来室生徒数が年々増加傾向にあるが、保健部内(非常勤職員含む)の連携により、保健室の機能的役割を果たすことができた。 ○要配慮生徒への支援は、学年部との連携・協力を主とした組織的な対応により、円滑に実施できた。 ○環境教育につながる新しい取り組みにより、生徒の主体性を育てる委員会活動が展開できた。 ○スクールカウンセラーを活用した教育相談は、希望に見合った時間数の確保が課題である。 ○環境衛生では、清掃の見直しに関する意識調査を総括し、次年度以降で具現化していきたい。
図書部	読書活動を通して生徒の情操を豊かにするとともに、広汎な知見や幅広い思考力・積極的な探究心を持った生徒を育てる。	・各教科と連携しながらメディアセンターとしての図書館運営を目指し、生徒・教職員の施設利用および図書の貸出を促進する。 ・生徒の積極的な探究活動が円滑に行えるよう、府立図書館等の相互貸借を活用し学習環境を整備する。 ・図書委員会等の活動を通して生徒に対する読書の啓蒙に努める。 ・図書館内での様々な企画・展示およびHPを活用しての広報活動に努め、「発信する図書館」を目指す。	B	・生徒の学びが円滑に行えるよう学習環境を整備することができた。 ・行事や季節に即した展示や校内の式典や講演内容に関連する書籍の展示などをタイムリーに行うことができた。 ・生徒の図書貸出の促進については検討を続けていく。

教科	重点目標	短期経営目標達成に向けての具体的取組	評価	
第1学年部	希望進路実現に重点を置き、学力向上に意欲的な姿勢を育む。また、多くの人と関わることで学校生活を発展させる力を育成し、自己肯定感を高めていく。これらを通して、東宇治高校への帰属意識向上へと繋げる。	・人権意識、マナーモラルの育成 ・安易な遅刻選択を回避させる指導 ・授業規律の徹底 ・家庭学習習慣を定着させ、スマートフォンに依存させない ・他と関わり、学校生活を全力で楽しむ力の育成 ・主体的に行動する力の育成	B	・社会集団の一員として周囲の変化に敏感になり、主体的な行動を選択する力を育成することができた。 ・基礎学力の定着を目標にした学年独自の取り組みを授業外で実施し、自身の学習を振り返る機会を設定することができた。 ・授業中のタブレットの扱いに関して、課題の配信や提出、クラスの意見集約など効果的なICT活用を進めることができた。
第2学年部	生活規律を確立させ、将来社会に貢献できる姿勢を伸長させる。自他の相互理解により、周囲と関わるができる力を培う。進路目標を具体化させ、主体的に課題を解決する姿勢を培う。	・日常生活について、自分の行動や身なりを確認できるよう指導する。 ・教育活動全般において、他者を理解し、行動することを意識させる。 ・模試を活用し、進路目標を明確にさせる。また、進路実現のための学習計画について考える機会を作る。	B	・全体として落ち着いた高校生活を送っている。遅刻や登校しにくい生徒には他分掌と連携して指導した。 ・文化祭や研修旅行等の行事を通して社会集団としての協調性を身に付けさせた。 ・面談やオープンキャンパスの参加、志望理由書の作成により進路に向けての意識づけは進んだ。ただ、「家庭学習の定着」が課題であり、今後指導をしていく。
第3学年部	希望進路の実現に向けて、努力し続ける姿勢の育成を継続し、集団で進路実現に向かう姿勢を意識させる。周囲と関わるなかで、相互理解し好ましい人間関係・生活集団の構築に取り組む姿勢を培う。	・模擬試験の効果的な活用により、的確な進路指導を行う。 ・基本的生活習慣の確立・実践を継続して指導し、進路決定後も規律ある生活を送れるよう指導する。 ・様々な課題を抱える生徒に対して、各分掌と連携を取り、学年内でも連絡を密にして、適切な指導を行う。 ・学校行事などの指導を通して、第3学年という集団であることを意識させる。 ・社会人としての身だしなみ、言葉遣いなどを習慣づける。	B	・模擬試験の結果を踏まえ、個に応じた進路指導を実践できた。併せて、一般入試に向けて最後まで取り組む指導も十分に行った。 ・遅刻指導については、関係分掌の協力を得て、少しずつではあったが改善が見られたが、なかなか改善させることができない生徒もいた。また、一部の生徒ではあるが、身だしなみ指導において十分な指導ができなかった。 ・様々な事情を抱えた生徒に対して、各分掌と連携を取りながら高校生活を送らせることができた。
事務部	学習環境の整備並びに希望進路実現の支援	引き続き予算の効率的な執行と経費節減を心がけ、本校の教育目標の達成に必要な予算を確保、学習環境の整備も継続する。老朽化した施設設備の改修についても持続的かつ計画的に実施する。希望進路実現に向けた就学支援制度の一層の周知を徹底するとともに、丁寧な個別対応に努める。	B	光熱水費や物価の高騰が継続する状況下で、目標の達成に向けて尽力した。また、希望進路実現に向けて就学支援制度の一層の周知を徹底し、丁寧な個別対応に努めた。

教科	重点目標	短期経営目標達成に向けての具体的取組	評価	
国 語	教育のICT化や新学習指導要領に対応できるよう、積極的な授業改善に取り組む。	・「考える力」の基礎となる漢字、語彙の学習指導を丁寧に行うとともに、文章を読み論理的に考える力や、自分の考えを適切な言葉を用いて他者に伝える力を養う。 ・ICT教育の具体的手法や効果的指導法を研究し、教員間での情報共有を図る。 ・新学習指導要領の目指す学力を身につけさせるため、教材の精選や指導法について研究を深める。	B	漢字や古文単語などの小テストを毎週行うとともに、文章読解については、精読と速読の両面の指導を行った。3年生の授業においては、共通テストの変更点をふまえ、実用的な文章の読解や、複数の文章や資料の比較などに取り組ませるとともに、文章表現につなげる活動をさせた。文章を読み自分の考えを表現する力を養う指導の一環として、夏休みには読書課題に取り組ませた。読書体験記や俳句の全国コンクールにも応募し、複数名の生徒が表彰された。1、2年生の授業においては限られた単位数の中で扱う教材の精選が必要であり、教科会などを通じて意見の交流を行いながら、工夫を重ねている。
地歴公民	授業を通して生徒の興味・関心を高め、生徒の主体的な学びにつなげる。SDGsをはじめとする現代の諸課題について考察する態度を養う。希望進路を実現させるための学力を育む。	・ICT・視聴覚教材を、効果的・発展的に活用し、生徒の主体的な学びを促進させる。 ・JICAエッセイコンテストに向け、公共の授業内でSDGsを取り扱い、受賞を目指す。 ・教科内での授業研究を実施し、各教員が授業改革を行う。 ・進学講習を実施し、進学希望者の希望進路を叶える。	B	授業において、写真資料や風刺画・動画など、生徒の理解を促進するためのICT・視聴覚教材を効果的に使用した。今後さらなる効果的なICT・視聴覚教材の活用を教科として模索していく。今年度のJICAエッセイコンテストは1名が青年海外協力隊OB会長賞、1名が佳作を受賞した。事前指導を行った上でほとんどの生徒が提出することができた。進学講習の受講人数が少ないことが課題である。より生徒にとって魅力的な講習のあり方を模索し、効果が見込まれるアイデアは積極的に実施していく。
数 学	基礎的な数学の学力を確実に身につけさせ、学んだ知識を活用して問題を解決する力を養成する。	・ICTの積極的な活用等様々なことに挑戦し、教員間で情報共有を図ることにより、授業改革を行った。 ・毎授業の改善やテスト前の補充、小テストの実践などで基礎的な学力を確実に身につけさせた。 ・定期テストに知識を活用する問題を出题し、その対策を通して応用する力を身につけさせた。 ・新教育課程における授業の進め方・評価等の研究を深めた。	B	・新学習指導要領の実施に伴い、1、2年生の進捗状況について全体で共有することで、次年度以降を見据えた議論を行っている。 ・特に主体的に学習に取り組む態度の評価についての議論を行っている。 ・他校でのICTの活用方法等を全体で共有し、様々な実践例を知ることができる環境を整えている。 ・新しい「統計」という単元について、どのような授業を展開していくべきかについての議論を進めている。
理 科	科学的な自然観や考え方を身につけさせ、自然の事物・現象に主体的に関わり、科学的に探究しようとする生徒を育てる。	・ICT機器の積極的な活用及びタブレットを効果的に活用し、授業の導入の方法や生徒の理解を促進する方法について研究し、授業実践を行う。 ・実験やグループ活動の機会を積極的に設け、実験に関わる基本的な操作を指導し、周囲と関わりながら他者と協議させ、課題を解決する姿勢を身につけさせる。 ・観点別評価による、指導と評価の一体化を推進する。 ・授業のUD化に取り組む。	B	・ICTの活用については、視聴覚教材の提示や、反転学習に用いることで授業の理解度を向上させることができた。また、グループ活動でロイロノートなどを活用し意見を出し合う中で深く考察させ、理解を深める取組ができた。 ・実験については、実験室の空調設備が整っていないため暑い時期には実験をさせることがほとんどできなかった。また実験室ではWi-Fiに接続することができないため、実験で得られた個々のデータを即時的に共有することができず、実験結果などの相違点や共通点を確認させるのに時間を要した。 ・観点別評価については、テストの出题について工夫し、評価した。 ・授業のUD化については、授業開始時に、本時の学習内容を伝え、わかりやすく説明することを常に追求した。また、資料や配付物のフォントを統一した。
芸 術	芸術の幅広い諸活動を通して、芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばす。	・新型コロナやインフルエンザ感染状況に応じて授業運営を工夫する。 ・各科目共通して、表現力、鑑賞力を伸ばすために基礎基本となる技術の習得を重点的に行う。 ・ICT機器の効果的な活用方法を工夫しながら、芸術科相互の実践研究の交流を充実させる。	B	・科目によっては感染症対策緩和に伴いグループワークをより充実させた取り組みができた。各科目とも一定の技術水準への到達をめざす指導を行った。また各生徒の進捗状況を把握し、個々の感性や能力に応じ適切な指導や助言を適宜行う等丁寧な個別指導を心掛けた。Wi-Fi環境は整っていないが可能な範囲でICTを活用することができた。科目間での交流の場であり、鑑賞能力を高める授業の一環としての「ひろがる心展」も、個々の生徒の個性や能力を発揮する機会として有意義なものとなった。

教科	重点目標	短期経営目標達成に向けての具体的取組	評価	
保健体育	『心』と『体』の調和のとれた生徒の育成。 健康の保持増進に必要な行動を自発的・自主的に実践する能力を身に付けさせる。	・感染状況に配慮しつつ、柔軟に授業内容を設定して実施する。 ・運動やチーム活動を通して、集団の中での行動の仕方、規範意識の定着や良好な人間関係の育成を目指す。 ・健康的な生活の基盤となる、基礎体力の向上を図り、保健で学習したことが生活に活かせるようにする。	B	・年度当初の集団行動を徹底して実施することで、遅刻防止の意識や集団としての行動様式を習慣づけさせることができた。年間を通して、この姿勢や挨拶の励行を維持させることで規律ある学習集団の形成ができた。 ・ルール遵守・安全面確保の観点から、装飾品などのチェックを実施し、正しい身だしなみで活動させることができた。 ・グループで、協力して練習やゲームの活動を通して、協調性や相互理解の態度の育成を目指した。 ・保健・体育ともに教材に応じて、ICTを活用し、効果的に学習させることができた。
家庭	実践的・体験的な学習活動を通して様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成する。	・「みらいを明るくできる人」を育成するため、「持続可能な社会をつくる暮らしの担い手になる」をテーマに教科指導を行う。 ・家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫する。 ・ICTを活用し生徒の理解を促進させる。	B	・生活設計を基盤にして各領域を展開し、SDGsを身近に感じる取組や伝統的な生活文化に関わる実習、子育て理解教育等により、生活の諸課題について、生涯を見通した課題解決力を養った。 ・契約にかかわる関連法律並びに消費者保護等の消費者教育を重点的に実施し、消費者としての自覚を養った。 ・生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を考えるホームプロジェクト実践を行った。 ・ICTの活用やグループワーク等により、生徒の理解を促進できた。
英語	英語によるコミュニケーション能力を強化するための授業改善の取組を行うとともに、ICTを活用した授業を創意工夫する。	全学年の4技能のテストを以下のとおり実施する。 ・リーディングテスト(初見)は年間4回以上 ・リスニングテスト、スピーキングテスト、ライティングテストは各々年間2回以上 本校生徒の実態に合った目標を設定し、目標達成を目指すとともに、自ら学習する姿勢を身につけさせる。 英語科教員間での研修や授業見学などを通して、より良い授業を考え、実践する。	B	・4技能テストについては、各学年とも計画通りに実施し、生徒の学力向上につながった。 ・週末課題、長期休業中の課題など、また、確認テスト等も行い、家庭学習習慣の定着を図ったが、生徒自ら学習する姿勢が一定見受けられた。次年度も引き続き取組みたい。 ・ICTの活用については担当者によって差があった。今年度の実践等を報告し合い、教科全体で効果的に活用できるように検討した。ただし、継続的に実施できなかったため、次年度は今年度以上に取組みたい。
情報	高度情報化社会における課題を認識し、情報機器を活用した問題解決の方法や情報モラルについて考えさせる。	・情報と社会について体系的・系統的に理解するとともに、情報と社会との関わりに関する課題を発見し、情報に携わる者として合理的かつ創造的に解決する力を養う。 ・情報活用能力の習得を目指して自ら学び、情報社会に主体的かつ協働的に参画し寄与する態度を養う。	B	・前期は基礎力の定着を図り、情報と社会について体系的・系統的に理解する力を養った。 ・後期では「みらいを明るくできる人」の項目を意識し、グループワーク等を通して、実践を重ね問題解決能力の向上を目指して取り組んだ。
総合的な探究の時間	実社会や実生活と自己とのつながりから問いを設定し課題解決に取り組む中で、主体的に動き他者と関わる力を育成する。新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。	・「国際教育」と「地域連携」を軸に、「自己探究」「教科をベースにした課題探究」の視点を入れ、生徒が主体となって探究活動が行えるよう企画会議と担当者会議が中心となって指導を行う。 ・1、2年次の学習が、3年次の進路選択からの進路実現となるよう系統立てた実践を目指す。 ・情報収集だけにならない「つながる」「発信する」視点でのICT機器の活用を研究し、担当者間での情報共有を図る。 ・外部講師や大学等機関と連携をとり、学習内容に合わせた指導体制を確立する。	B	・「自己探究」(1年生)では、仕事を通じて社会とどのように関わることができるのか探究活動を進めることができた。多様な職業を考えるために外部講師を招いた。 ・「教科をベースにした課題探究」(2年生)では、自分たちの興味関心に合わせてグループ編成を行い、インタビュー等の活動を入れながら探究活動を行えた。 ・2学期以降は校内ポスターセッションを実施し、探究エキスポおよびグローバルネットワーク京都交流会での発表に向けての指導を行えた。 ・今年度の学習内容を踏まえ、「国際探究」の視点を入れて授業の立案を検討したい。

学校運営協議会による評価	・概ね計画していた取組が進められたと思うが、各分掌で対応を工夫されたことにより概ね目標を達成されていることと思う。 ・入学して、卒時に学びの成果を実感でき、一人一人の進路実現ができるように教育活動の取組を進めていただきたい。
次年度に向けた改善の方向性	・今年同様に、東宇治高校の取組や魅力を中学生のみなさんに、迅速に発信できるように努めてほしい。 ・新しい国際探究コースを着実に進めることやDXハイスクールの取組を着実にやってほしい。